

曾我物語図屏風



2022年1月22日(土) ~ 2月21日(月)

「曾我物語」の誕生

建久四(二九三)年、源頼朝は富士の裾野で7ヶ月の期間に及び、東国の武士たちを集め大規模な巻狩を行った。この軍事訓練も兼ねた狩猟は、征夷大將軍となった頼朝の權威を示す意味合いが込められた「大イヘン」であったと考えられている。しかしながら、この巻狩の名が後世有名になったわけは、曾我十郎祐成・五郎時致の兄弟による仇討ちが行われたことにあるだろう。

兄弟の父である河津三郎祐重(泰・通)は所領争いの中で命を落とした。母の再婚に伴い、曾我を名乗るようになった後も、兄弟はその仇である工藤左衛門尉祐経の命を狙い続け、同年五月二十八日、巻狩の最中に夜襲をかけ、本懐を遂げる。しかしながら、兄の十郎は頼朝臣下の新(仁田)四郎忠綱(常)に討ち取られ、弟の五郎は頼朝の小舎人五郎丸によって捕らえられたのち、処刑される。

この出来事は、首御前らの語りによって関東地方を中心に広がり、箱根権現、伊豆権現の僧侶らによって唱導の題材として文字化され、鎌倉時代末頃に漢字のみで記された真名本「曾我物語」が誕生した。その後、南北朝時代になると、仏教的な要素を薄くした上で劇的な展開で脚色し、漢字と仮名

文じりて記した仮名本「曾我物語」が成立する。さらに能や幸若舞、浄瑠璃、歌舞伎など多く芸能の題材となり、それらは「曾我物」という総称で呼ばれるようになる。

「曾我物語図屏風」

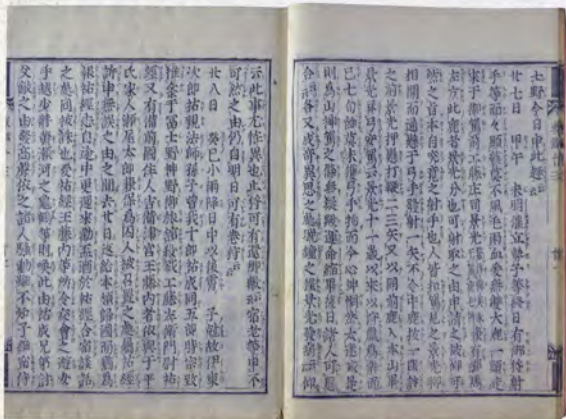
「曾我物語」は絵巻や版本、浮世絵など絵画化される機会も多く、当館でも二組の「曾我物語図屏風」を所蔵している。「曾我物語図屏風」は現在四〇点程その存在が確認されているが、基本的に右隻(向かって右)に富士の裾野で催された巻狩の情景(以下「富士巻狩図」)を、左隻(向かって左)に兄弟が仇討ちを遂げる夜討ちの場面(以下「夜討図」)を配するケースが多い。

しかしながら、それぞれの場面が絵画化される時期には時間差があるといわれている。まず「富士巻狩図」が「夜討図」に先立って室町時代の初期に絵画化された。「夜討図」に関しては少し遅れ、幸若舞のアキスト集である「舞の本」に描かれた挿絵などをもとに、室町時代後頃に絵画化された説が唱えられている。両者をあわせて「双(右隻と左隻を合わせて)双と教える」の屏風として描かれるようになるのは、室町時代末頃であろうと考えられている。



「七十一番職人歌合」(部分)
江戸時代 29.8×187.4cm

中世における職人の姿が2人組と和歌を形うて描かれた絵巻物。室町時代後半頃に原本が成立したと見られている。25番は「琵琶法師」と「女めくら」がセットになって描かれているが、「女めくら」は「曾我物語」の一節を語っている。



「吾妻鏡」巻第13
寛永3(1626)年 28.9×21.1cm

鎌倉幕府が編纂した歴史書。原本は現存せず、成立以降いくつかの写本・版本が流布しているが、本書もそのひとつにあたる。曾我兄弟の仇討ち関連記事も記載されており、巻第13所収の建久4年5月28日条には、兄弟たちが工藤祐経を殺害した旨が記されている。

*1 巻狩:多数の勢子(集団で行う狩猟で獣を駆り出す人)が獲物を取り巻き追いつめた上で、武士らが捕える狩猟法。
*2 首御前:三味線を弾きながら歌や物語を聞かせてまわり、金品を得る盲目の女芸人。
*3 唱導:仏教の教理を説いて信仰に導くこと。
*4 幸若舞:室町時代に流行した、簡単な舞を伴う芸能のひとつ。



【右隻】



【右隻】

当館で所蔵している二組の屏風は、どちらも江戸時代の制作と考えられているが、①の「曾我物語図屏風」はその画風から江戸時代初期の狩野派の絵師によるものとされている。それに対し②の「曾我物語図屏風」は、江戸時代初期の絵師である、岩佐又兵衛の画風で描き出されているものの、②と同じ場面配置で描かれる屏風が他にも確認されていることから、おそらく又兵衛工房周辺において制作されたものであろう。

①②とも右隻の「富士巻狩図」には、新田忠綱による大猪狩(C)など、巻狩で起こったとされる出来事が屏風全体に描かれている。鹿を狙う祐経を追いかけるものの、仇討ちも失敗してしまっ曾我兄弟の姿(D)は両屏風とも画面左下に描かれており、落馬する十郎と駆け寄る五郎を確認することができる。兄弟や馬の向きなどの違いはあるものの、描くにあたり選択された主な場面は両者ともにおおよそ同じである。

右隻に対し、左隻に関しては構図が異なる箇所がいくつも見られる。十郎が祐経の屋形の様子を見るために出かける場面(!J)や、仇討ちに参加することを止められ泣く帰る兄弟の従者たち(M)そして祐経の寝所へ踏み入り仇討ちを遂げたのち、大立ち回りをする十番斬のシーン(R)など、基本的な話の流れは同じであるが、夜討ちが行われた翌日、頼朝の前に祐経の嫡子である大房に扇で打たれる五郎の姿(V)などは②の屏風のみに見られる。なお、①②ともに異時同図法が用いられ、兄弟が異なる場所でも何度でも登場するが、物語の時間通りに場面をたどらうとすると、①の屏風は右や左に場面を行き来しながら上から下へと時間軸が移っていくのに対し、②の屏風は右上からおおよそ起った出来事順に描かれている。

描かれた出来事については、A-Vに場面ごとに分け左に示した。ぜひ各場面を比較しながら、二組の屏風についてその詳細を見ていただきたい。



①「曾我物語図屏風」 江戸時代 各隻154.0×364.4cm

【左隻】



②「曾我物語図屏風」 江戸時代 各隻157.3×351.6cm

【左隻】

「富士巻狩図」

- A 巻狩を眺める源頼朝一行
- B 梶原景季と畠山重保の鹿争いか
- C 新田忠綱の大猪狩
- D 仇討ちに失敗する曾我兄弟と走り去る工藤祐経
- E 兄弟を見守る畠山重忠と和田義盛

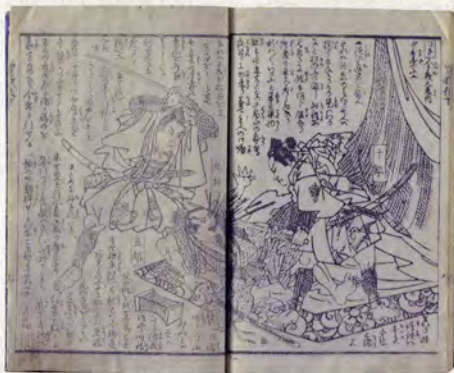
「夜討図」

- F 兄弟の仮屋に彼らを支援する武将から長持が運ばれる
- G 湯支度(馬を湯で洗い、庭で乗り慣らす)をする他の屋形の様子
- H 酒盛りをして騒ぐ他の武将の屋形
- I 祐経の嫡子犬房によって屋形に招かれる十郎
- J 祐経の屋形

K 十郎による屋形巡りの報告か

- L 仇討ちへの参加を止められたため、切腹しようとする
従者の鬼王と、道(団)三郎を止める兄弟
- M 兄弟の形見を持って曾我の里へ帰る従者
- N 本田近経が祐経の屋形へ兄弟を案内する
- O 互いを見合う兄弟
- P 大礮の虎(十郎の恋人)の妹、ぎすが祐経の寝所へ案内する
- Q 寝所で眠る祐経と王藤内
- R 十番斬
- S 夜討ちに慌てる武士たち
- T 女性の着物を被り五郎を油断させ捕らえる頼朝の小舎人五郎丸
- U 騒ぎを聞きつけ応戦しようとするも一法師丸に制止される頼朝
- V 詮議の場にて犬房に扇で打たれる五郎

● 黒字…①②共通 ● 赤字…①のみ ● 青字…②のみ



【新編曾我物語】後輯

柳水亭種清作・楊州周延画

明治14(1881)年 17.5×11.8cm

江戸から明治時代にかけて活動した、戯作者の柳水亭種清による『曾我物語』。挿絵は浮世絵師の楊州周延で、『曾我物語』の各場面がわかりやすい画で表されている。

語り継がれる『曾我物語』

『曾我物語』は能や幸若舞、浄瑠璃、歌舞伎など数多くの芸能の主題となったが、それら『曾我物語』関連の作品は『曾我物』と呼ばれ、おびただしい数の作品が世に生み出された。能においては、「小袖曾我」「元服曾我」などが知られており、「望月」という作品にも兄弟の仇討ちが語り物として登場するシーンがある。幸若舞では「十番斬」「夜討曾我」「和酒酒盛」などの演目が人気だが、特に『夜討曾我』などの物語のクライマックスシーンは人気が高く、絵巻や絵本などの恰好の題材となった。

江戸時代になると、歌舞伎の世界において『曾我物語』はメジャーな演目となる。江戸の歌舞伎座においては、最初の作といわれる『曾我十番斬』(承応四(二六五)年)から始まる。曾我物の公演が大当たりとなり、享保年間(一七六〇〜一七六九)以降の江戸三座(幕

府から興業を認められた三つの座)の初春興行において、曾我狂言を上演するようになった。『曾我物』を演じる役者たちは錦絵の題材にもなったが、役者ばかりではなく、曾我兄弟の仇討ち自体が錦絵で表されることも多い。さらに、江戸時代を通じて『曾我物』の版本も多く出るものが、中には『曾我』をタイトルに冠しているもの、内容が『曾我物語』とはかけ離れたものもあった。

こうして、若くして富士の裾野に散った『曾我』兄弟たちの生き様は、『曾我物語』として人々の間で広く知られることとなった。また、現在も多く『曾我物語』ゆかりの地が各地に残されており、兄弟の魂を鎮めるための供養も行われている。仇討ちという史実に、劇的な展開や後日譚が追加され、今も人々の心を掴んで離さない兄弟たちの物語は、これからも長く語り継がれていくだろう。



【曾我物語 富士狩場十番切図】

歌川貞秀筆 元治元(1864)年
36.5×74.6cm

十番斬の場面が題材となっている。大立ち回りをする五郎が画面中央に、左手には兄の十郎と相対する新田忠綱が、画面右奥には頼朝の姿が描かれている。

主要参考文献

- ◆井澤英理子「曾我物語図考—双屏風の成立について—」(『日本美術襍稿 佐々木剛三先生古希記念論文集』明德出版社、1998年)
- ◆黒田泰三「曾我物語図屏風 富士巻狩・仇討図」(『國華』第1274号、國華社、2001年)
- ◆井澤英理子「又兵衛風の曾我物語図屏風の量産について」(『日本美術史の社 村重寧先生・星山晋也先生古希記念論文集』竹林社、2008年)
- ◆三戸信恵「曾我物語図屏風に関する一考察—新出本と渡辺美術館本を中心に—」(『國華』第1496号、國華社、2020年)

山梨県立博物館 シンボル展
曾我物語図屏風

編集・発行 山梨県立博物館
Yamanashi Prefectural Museum

〒406-0801 山梨県笛吹市御坂町成田1501-1
電話 055-261-2631

本リーフレットは、シンボル展『曾我物語図屏風』(令和4年1月22日(土)~2月21日(月))に展示した『曾我物語図屏風』を中心に解説するものであり、展示内容・資料のすべてを掲載しているものではない。掲載している資料はすべて山梨県立博物館所蔵である。なお、人名は仮名本『曾我物語』に準拠した。また、本文中では「めくら」などの語を歴史用語として使用している。本文の執筆・編集は、松田美沙子(山梨県立博物館)が行った。

印刷 株式会社 内田印刷所 〒400-0032 山梨県甲府市中央2丁目10-18 電話 055-233-0188
令和4年1月22日発行